

浄土

1981-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月十部一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受承認雑誌) 第三二五号
昭和五十六年七月二十五日印刷 昭和五十六年八月一日発行

第四十七卷

第八号



暑 中 お 伺 い

魂棚の奥なつかしや祖母の顔

明日の二十一日が命日なので、今夜はお逮夜。在りし日の祖母の姿を想い起こして合掌念仏。そして敵かに鐘の音を二つ。一つは、みほとけであります祖母の面影に向けて、一つは、わが心への警鐘の一打。——どうぞ、明かるく、仲良く、元気に、日明かし、日暮らしができ



ますように……。

合掌し、冥目する私の頬と心に、ここで、夏の一宵の瞬時の微風。夕方に、樹木の緑に施した打ち水の涼が、私の心気にかすかに触れて、心なごむ一刻。軒下の風鈴がそぞろに揺れ騒いで、あたかも祖母の声を聞くがごとく、ここに一日の猛暑を忘れて、東の間の安息を得、まづは心身ともに安堵したことである。

というのも、この夏は、昨年の冷夏とはうってかわつての猛暑。仕事もしないのに、いたずらに玉の汗を流して、無駄なエネルギーの使い放態。健康な身体をも扱いかねてもてあまし、無意味な怠惰を重ねることしきり。これでは暑中の休暇も、終つてみれば宿題の山だけが残つてしまうことになりかねないので、祖母のみ魂にお願ひし、少しづつでもおのれの勤めにいそしむために、いささかとも真剣に合掌念仏を繰り返したのである。ともかく明日からの暑中の一日一日を精一杯に過すことを、ここに記して誓う次第である。

誌面を借りて、読者の皆様へ、衷心より暑中お伺い申し上げます。

(原 裕)

八月号



念仏三昧はこれ仏の本願なり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.172)

目次

法 話

お盆を想う(下)……………後 藤 真 雄……(2)

ひとくち法話

不共法 ……………魚 尾 晃 久……(6)

<特別寄稿>

浄土の教えと社会福祉……………小 川 金 英 ……(10)

=日本とスリランカ=友情の絆……………土 佐 舜 成……(14)

三絶・四限定

一俳句作法について……………河 野 喜 雄……(23)

<読者のページ>

私の生き甲斐……………清 水 栄……(30)

<童話シリーズ>

けんちゃんのおぼん……………布 村 哲 哉 ……(18)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(28)

<表紙裏・巻頭言> 暑中お伺い……………原 裕

念仏ひじり三国志㊦——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(33)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

お盆を想う (下)



後 藤 真 雄
ごとう しん ゆう

(浄土宗布教研究所長
東京・三好円通寺住職)

○ふるさと

お盆ともなれば切って切れないのが故郷である。帰郷の為の列車が何本も臨時に用意される。ふるさとを持つものの喜びである。

年に一遍のふるさと帰り、そこには、父母、祖父母や、御先祖の墓もある。家族揃ってのふるさと帰りに、お土産の荷物は軽い。

くびをながくして待っている両親や祖父母は、孫共や子の為に、あれや、これやと心を配るのである。

車窓から眺めると、近づく故郷の山々の姿は、なつかしくもあり、少しも変ってはいない。

嫁にいった姉妹も、子供を連れて集まって来る。皆それぞれに成長して立派になっている。

「チャント御先祖様からの田畑は護っているヨ」と、ほこりしげな顔が故郷で待つ両親の顔なのである。

御先祖様からの田畑とは何であらうか。冷害やら水不足や、虫害やら、天災地変、毎年同じように田畑の作物がとれるわけではない。その都度、その都度の苦勞から出た生活の智慧、それが今でもうけ継がれ、更に苦勞が重ねられて、今日に及んでいるから、先祖からの田畑なのである。

「これうちで出来た西瓜だよ、この瓜も、この唐もろこしも……」、都会から帰って来て、御馳走になる身に

は大したものにも見えず、当りまえの様にも見えるものも、これを作ったものにとっては、苦心に苦心の作なのである。でも決して「私が作った」とは云わないのである。「うちの畑で出来た」というのである。「今年の稲の出来栄は……」というのである。それは如何に天地自然の恵みの大きく、自分の力の少ない事を、身をもつて、いやというほど承知しているからである。しんけんな祈りの気持と共に、総てが総合された結果として、出て来たものであるからである。

○墓詣り

御先祖の墓参を済ませると、ホッと何か一役済んだ様な気がする。墓のまわりの草をとり、香花を供え、手を合せる。

御先祖の御苦勞に対する感謝の気も出て来る。何か未だに大した事も出来ない自分にはづかしささえ感じる。幼い子供達が無心で小さな手を合わせる姿が、何か心の奥底にジーンと来る様な気がする。

墓詣りのあとは本当に気持の良いものである。何故か。それは催促されない事をやったからなのである。ど

こからも催促も督促もないのである。自分から進んでやるべきことをやったのである。それは自己の成長でもあり、前進なのである。

先祖の墓前にぬかずき、敬虔な姿で合掌する事は、そのままた自分に對して合掌している姿でもあるからである。

これが本当の良い気持なのである。その裏に、名誉とか地位とか財産とか、他の人々にも、何のかかわり合いもないからである。

一等になった喜び、儲かった喜び、成功した喜び、皆それぞれに良い気持ちには相異なる。然し多少なりともその蔭には、ねたみ、そねみ、うらみ等がともなうのである。墓参にはその片鱗もない。宗教的な喜びである。

積尊は法句經(六八)に

行為ニ德善^{サバ} 進觀ニ歡喜^{ンデ}

行いを作しおわりて、

ところに悔なく、

顔に喜笑^{ヨウシヤウ}あり、

おもひたのしく、

応來受^{セン}レ福 喜笑悦習

その果報をうく、

まこと かかる行いは、

善く作なされたるなり。

と云つておられる。

○団らん

さて墓参も済み、一同くつろいで、団らんの一刻が来る。話し声も段々大きくなる。

女は女同士、子供達は子供達で話ははずむ。笑いに満ちたふるさとの茶の間は、幸福一杯である。

話は進学の問題、躰の問題、子供達の成長にともなう手に負えない問題。それぞれの立場から、いろいろな意見も出れば、失敗談も出る。その度毎に笑のうづは広まってくる。

子供や孫達の急速な成長に、とても、ついて行けない年老いた両親や祖母達は、黙って聞いているより仕方がない。一番小さな孫を膝の上にのせて、唯一の話し相手になっているのである。勝手放題の事を、勝手にしゃべり合っている連中の姿が、うれしく感じられる。そして今年も、まあまあ無事にお盆を迎えてと、今日生きている

悦びをかみしめ直すことである。

○盆踊り

夕方から盆踊りの大鼓が鳴り出す。中央にやぐらが組まれ、その上で大鼓をたたき、スピーカーから唄が流れ出す。浴衣姿に、団扇を持って、大勢集まって来る。初めは小さい子供達の輪が踊り初める。その間に大人が混じり初める。暗くなるにつれて、踊りの輪は次第に増して来る。これもお盆の風景である。掛声も揃い、手足も揃って来る。無心に踊る悦び、この悦びは今日生きている悦び以外の何であらう。健康にめぐまれ、今日、今生かされている事に気付いた時に、踊らずにはいられない姿となって表われたのが盆踊りである。

法然上人は一紙小消息の中に

「うけがたき人身をうけて、あひがたき本願にあひて、おこしがたき道心をおこして、はなれがたき輪廻の里をはなれて、生れがたき浄土に往生せん事、悦びの中の悦びなり。……」

といわれ。法句經では

「正法しやうぽうを耳にするはかたく、

諸仏みほとけの世に出づるもありがたし

「世間有レ仏難ニ 仏法難ニ得レ聞ク」

とある通り、生きている事に対する強い反省から真の悦びを知り、その知る事の出来得たのも正法のあったお蔭、更にそれを説き伝えられた仏の世に出で給うたお蔭と受け取って来るのである。

明年昭和五十七年四月七日は法然上人降誕八百五十年に当り、いろいろと慶讃の行事が計画されているが、これも法然上人がみほとけの御子として、この世に出でられた事の心からの悦びである。

○苦と楽

悦びとは楽なればこそである。さてそこで苦と楽との相異は何だろうかと考えたくなるのである。終日立ってばかりいる人に取っては坐る事が楽であり、坐ってばかりいるものには立つ事が楽である。寝ていたから起きるのが楽、起きていたから寝るのが楽なのである。して見ると苦と楽とは別のものではない。本当の楽しさは、苦を乗り越えた処に生ずるのである。苦を恐れた処に本当の楽はないのでさる。

極楽の八功德池の小波の音が、苦、空、無常、無我の人生觀を説いていると觀經にある様に、人生は苦なりと受け取る処に本当の楽を見出す事が出来るのである。

前から述べて来た様に、お盆に想う事は、今生かされている事に気付く事であり、そして、次に深い反省が起って来る。そして続いて生ずるのが孤独感なのである。

年老いたものには、必ず起る老人性孤独感なのである。

「こんなに苦勞したのに、少しもわかってくれるものはない……」。こんな考えが起って来るのである。

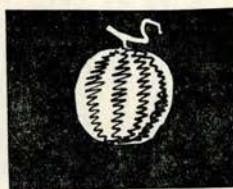
「大変だったろう」「いたかったろう」とわかってくれる人がいると、苦は楽に変わって行くのである。

念仏する事によって阿弥陀様はわかって下さるのである。苦しい事も、悲しい事も、つらい事も、念仏する事によって孤独の淋しさ消え、念仏する事によって苦しきは楽しみへと変わって行くのである。

お盆を想うことは、今日生きている事が、悦びの中の悦びとなって来るのである。

これが念仏の生活であると思う。

ひとくち法話



不^ふ

共^ぐ

法^{ほう}

仏教に八万四千の法門がある、とよくいわれています。それらの法門にお釈迦さまのお教えは全て經典に記録されています。随分沢山あるのですが、またかなり難しいものがあります。簡単には理解しにくいものもあります。お釈迦さまは、生涯の後半四十年間

をあの暑い広いインドをコツコツ歩いて説法したものです。対機説法といって、相手の程度に応じた説法をしたようです。程度の低い者に余り高遠な話をしてもらえませんでした。その一つに不共法という説法があります。

魚^{うお}
尾^お
晃^{こう}
久^{きゅう}

(三島市願成寺住職)

○不共ということ

不共法というのは、特別の、他と関係ないという意味です。大乘仏教では十八不共法の内容を列記しますが、その二、三をあげてみますと、他から指示されることなく布施を行なう、他から指示されることなく戒を守る、などです。

不言実行という言葉がありますが、一寸それに似ています。人に言われなく、自発的にだまって、人と関係なくなる、という気持です。

○こうしなさい

人はよく、人にこうしなさい、ああしなさいと指示されて仕事をやるがあります。そういう場合、結局、やらなければならぬのですから、笑顔でやればいいんですが、ブ

ツブツ文句をいながらやる人も少なくありません。その人間の性格にもよりますが、何よりも世に処す考えのちがいです。ところが不共法の立場からいえば、よごれているから人に言われなくても黙って掃除をする、邪魔だから自発的にだまって取りのぞく、ということになります。

○不共法の実動者

私の町に市川藤男さんという人がおります。長らく町会長をしています。町に狩野川に注ぐかなり大きな川がありますが、その川に水の汚染度をしらべるために県、市が鯉を放流しました。住みつくかどうかという試験です。川を綺麗にしよう、という運動のころみですが、地域住民の心を喚起して魚がどうやらふえてきました。だんだんふえてきて、餌が必要になりました。鯉はどんどん大きくなります。市川さんは毎朝五時と夕方の

四時に、餌を与えるようになりました。今は、橋の上にわざわざ沢山の鯉の姿を見にくる人も出てきました。餌の量もふえて、市川さんは餌さがしに忙しく、夕方四時になると何処にいても、子供Ⅱ鯉が待っていると、餌のやり場の川べりに出かけて行きます。今では鯉の市川さん、と有名になっています。先日は宮中に召されて、この鯉について陛下から色々きかれた、とのことでした。

正に、人に言われなくて、自から、鯉に餌をやらなくてはられない存在として、雨の日も風の日も、寒い朝でもどんな時でも、この困難な仕事に奉仕しています。尊いことです。そうしなくてはられない気持、本当に頭が下がります。

○無縁仏の供養

私の寺に新しく無縁塔が出来上りました。永い間、遺骨をあづけっぱなしで取りにこな

い、住所もわからないという人。それを集めて無縁塔にまつりましたが、毎年、お施餓鬼の日には必ずお塔婆を立てて下さる瀬川えんさんという寺のお世話人の奥さんがいます。無縁になって誰れもおまつりしてくれない、遺骨への御供養です。これも、勿論だれに指示されたものでもなく、そうしなくてはならないこの奥さんの仏心から出た誠に清らかな心の動きです。

こうしよう、と人に相談するでもなく、黙々と自分だけでその行いをする心の持ち主、それを不共というのですが、これは誰れにも出来るというものではありません。

○とる人、もってくる人

私はいろいろ珍しい草木を買ったり、もらったりします。昔の話ですが、先住職が庭に植えておいた日光シャクナゲを掘り盗られたことがありました。やっと花が咲いた年のこ

とです。盗った人が私のかわりにながめていることだろう、とあきらめています。やっと探して買ってきた銀モクセイも盗られました。盗った人が大切に育てているだろう、と思つて諦めています。

反対に、植木用の黒松が植えてあったことがあります。今は大部大きくなって良い恰好になりました。もつてきて植えていった人にかわつて私が成長を楽しんでいます。盗つてゆく人、だまつてもつてきてくれる人、後者はお寺の境内がよくなるように、と不共の精神に合致した人といえるようです。

○十八不共法

偉大な慈悲の十八種の勝れた特質を具えている大乘仏教の十八不共法の内容は、如來には、(1)身体に欠けるところがない、(2)粗暴な言葉はない (3)記憶に忘失した点はない (4)動揺した心はない (5)種々さまざまな妄想は

ない (6)うっかりした怠慢はない (7)意欲が減退することはない (8)努力が減退することはない (9)記憶が減退することはない (10)心の統一(三昧)が揺らぎことはない (11)理智が曇ることはない (12)解脱に達するのに遅延することはない (13)身体による所行のすべては智慧に支配されず、しかも智慧に従う (14)言葉による所行のすべては智慧に……従う (15)意志による所行のすべては智慧に……従う (16)前世において智慧を示して障礙がなかった (17)来世において智慧を示して障礙はない (18)現世において智慧を示して障礙はない、の十八項目を挙げています。まことにわれわれ凡夫には難しいことで、程度の高い徳目です。

ただ、私たちは、一寸むつかしいこの情操にたちむかつて生きよう、という意欲をもちたいものです。世の中が、たいへん明るくなるものと信じています。

特

別

寄

稿



浄土の教えと社会福祉

小 お 川 がわ 金 きん 英 えい

(全国社会福祉協議会副会長
国際障害者年岩手県推進協議会長)

○

豊かなものの中で豊かに生きることはとたやすい。然しその豊かさが必ずしもしあわせとはかぎらない。乏しいものの中で豊かに生きることとは容易ではないが、乏しい事自体が必ずしも不幸だとはかぎらない。

終戦後三十有六年の今日、高度成長によって展開された生活様式はすべて安易で利便で能率さえ上れば良いと云う。昔から乏しい中に工夫しつつ生活をいとなんで来

た明治、大正時代の人間には思いも寄らぬ事ばかりである。特に戦中、勝つまではの合言葉に神に仏に誓い祈りをこめて苦難に耐えて来たのが、終戦と同時に今までの耐えて来たことは騙されたとか、正直者が馬鹿を見た等と、神も仏もそっちのけで、他を押しつけても我利を競い、我武者羅な行動が罷り通る状態はまた経済上昇の一因となったかも知れないが、その反面麗わしい伝統美風として持ち続けて来た家庭に社会に支え合う心が失なわれ、人間不存の社会事相が日々巷に起り、又自然を破壊

してまで国土開発の美名にレジャー施設が勃興し、遂に自然のみでなく、人間の生命まで息苦しい公害が出て来た。又家族制度の崩壊と共に家庭のムードも変わり、核家族の増加と共働きの傾向は青少年、中小学校生にまで気配を増長せしめ、家庭暴力から学校暴力、果ては開放的関係にまで派及し、これが当然でもあるかの様な風潮となりつつある。

大経の五悪段、「五濁惡世」とは現代を指すのかと思われて懼れさえ感ずる。



かくの如き時代にこそ真の宗教活動がある可きを期待し、且つ求められている筈なのに、宗教家の惰眠もとより乍ら一方には当座的利益宗教が蔓り、大方この種に群集する現況を見る時、我浄土宗は先に善導大師一千三百年を契機として願共諸衆生と称名念仏の真意と実践を強調し、明年は又法然上人御生誕八百五十年を迎えるに当り宗教を家庭にと、生命の尊厳と念仏の生活を「いのちを考ふる」とのタイトルで教化啓蒙に努力する事が決定されたことは遅きに失したとは云え好機逸すべからずと

思う。ただし今日までの記念すべき機縁が真にその目標が達成されて居るであろうか。記念行事も盛大に催され、たし、記念事業もそれぞれ成果を納めたとは思うが、肝心の檀信徒にどれだけのメリットがあったらうか。信仰が深まり、願共の念仏が口称されたであろうか。今更乍ら私自身深く反省慚愧するのみである。

本宗の教義を他では自身往生の教えの如く誤認されている向があるが、願共、皆共と主唱する往生極楽の浄土教こそ、現代を豊かに共に生き、生かす大衆信仰の先達である。この事を実践を通して布衍徹底する好期であると思う。

この度の御生誕慶讃こそは単なるお祭りに終らず宗祖御生誕に至る御両親の尊い宗教生活を規範とし、念仏の中に地味乍らも家庭生活に根付かす可く僧俗一体となつて行動す可き時と思う。私はこの五月、ご生誕前の法然上人を尋ねたく本山寺、菩提寺を訪ね、御両親の強い御心願と胎教、そして又母上と別れて奈岐山中に厳寒と厳しき修行勉強の少年期を想い、深い感動を心に受けた。そして昨今いまわしい社会事象の起因も宗教的生活の欠除から来ている事を痛切に感じた。

法然上人が叡山を降り大衆に接し教化に立たれたのもここにあったと思う。お山仏教から市井の寺院形成となり、寺院は庶民の良きリーダーシップを取り公民館的役割をなし、更には音楽、美術の観賞の場として文化を高め、随所道場の対話教化に豊かな宗教情操を深めたが、時代の変遷と共にこれらは公共の施設に奪われ、かろうじて二世安楽の道場として老人教化の大役につとめて来たものの、高齢化社会の進みと共に老人大学、老人クラブ、趣味の会、観光グループ等あたかもこれが生涯教育、生甲斐対策であるかの様に集会し、寺院に集まる常連までが年々減少して来る現況ではないだろうか。お寺は老人の溜り場的な批判もあったが、この高齢者こそ豊富な経験を持つ人生の指導者であり、これらの人々の深い信仰のほとばしりが、今日まで家庭や社会を強く明るく伝統文化を築き育てて来たものと思う。この大事な人的資源を老人大学、老人クラブだけにゆだねて、教育者が手を拱いでいいのだろうかと思いを患うのは私だけなのだろうか。

今日の世帯はほとんど共働きであり、その為老人の居る家庭でまで子供達の保育は施設まかせで、家庭のふれ合いの中で静かな語りかけや、行動によつての信心啓発が少くなつて来ている感があるが、この事が如何に子供達に影響しているかと思ひ家庭における宗教教育をゆるがせにしてはならないと思うことである。

かく思う時ご生誕の慶讃を祖意に応えて一人一人の心に念仏の種を播き、念仏によつて真実人生の開頭がなされ、老人はもとより家族全員に植込む教化を進めねばならぬと思うことである。

その一步は先づいのちの尊さに目覚める事。今ここに生かし給う大みいのち、即ち阿弥陀如来の本願力に気付く事であり、生かされて生きる喜びに立つて、我も又すべてを生かし行く尊い一因と自負し精進させていただくことだと思ふ。

信仏は喜び働く精進へと道が開かれ、そこには如何なる苦難も至難事にもひるまず、それすらも恩寵として受け進み行ける事を法然上人のお念仏生涯に知ることが出来る。誰れかの歌に、この秋は雨か嵐か知らねども今日のつとめに田草取るなり、と今ここに与えられたこの事

に打込んで行ける信心があつてこそ生甲斐と云うものだ
と思う。

生涯教育、生甲斐等、生きやさいい見せかけではなく、勿論趣味も楽しみも無しに時を過して来た人達には趣味もレジャーも結構だと思ふ。然しその事その楽しみのすべても永遠につながるのちのいとなみと廻向する時、有難いナ、生きていてよかったナ、と生かされている喜びが湧いて来るものと信じられる。この大本願力に抱かれた安心こそゆるぎない生甲斐だと思ふし、然も俱会一処にある喜び、人と人とのふれ合いのうすれている社会に、この事なくして何んで明るい社会も、豊かな社会も、住みよい社会もあり得ようか。

○

現代社会では口を開けば福祉、福祉と云うが、福祉とは、人間の生命の保持と発展に対する欲求が満され、その事によって、より高い価値を追求することである。又生命の充実や人生の意義を感じ取ることである。辞典には、福とは天から与えられたしあわせ、即ちいのちを云い、祉とはしあわせをこの身に受け止める事だともあつ

た。

生命の尊厳に目覚めて充実した生活を皆と共に生きる、この福祉活動こそ法然上人の念仏教化であり願共諸衆生の誓願であつた事を今更ながら気付き、念仏の信仰こそが真の社会福祉の大道であると確信されて来た。

本年は殊に国際障害者年として完全参加と平等のスローガンをかかげて障害者に対する理解と何等屈托なく社会人として参加出来る社会にと世界中でこの運動が進められているが、人間が人間として当然享受出来る生活、差別などある可き筈がないのが当り前なのである。人間が人間を人間としていたわり合うこの道が仏者の道であり、今日の福祉の道であると思ふ。浄土の教えも又無差別平等の上に、然も青色青光と個々の尊厳をもとに無縁の慈悲心が行足として現われるのを念仏行と示されている。浄土宗の信行こそ真の社会福祉の道であり、本宗先覚者の行履がかつて浄土宗を社会事業宗と称したのもむべなるかなと思ふ事である。八百五十年を契機に念仏行が自他共に生かし生かされる道である事を啓蒙すべき時と思ひ知らされるこの頃である。

友情の絆

スリランカは、今から三十六年前日本が敗戦の失意のどん底にあった時、対日賠償を放棄してくれた恩義ある国です。

即ち戦争中昭和十七年四月五日と九日に、空母「瑞鶴」の艦載機をもって首都コロンボ、ツリンコマリ軍港を銃爆撃、多大の損害を与えたのです。

戦後昭和二十三年二月四日英国から独立、同二十六年九月サンフランシスコにおける対日講話条約の席上、各



と
土佐舜成
さ しゅん じょう

(財)国際仏教興隆協会広報局長
神戸市阿弥陀寺住職

国代表の日本に対する厳しい演説の中にあつて、当時大蔵大臣であつた現大統領ジャエワルデネ閣下は、法句經の一節をご引用され「両国民は仏陀の教えに随順する兄弟の間柄」と極めて好意ある演説をして下さつたのでした。

さて、スリランカの全人口一千四百万近くの約半数は月給五千六十円に相当するアメリカドルの二十二ドル以下にて、又子供達の四十八パーセントは栄養失調になり



—神戸市・阿弥陀寺に來寺されたスリランカ大使一行と筆者夫妻—

がちです。

欧米各国の宗教組織及び団体が既に援助に当たっていますが、一人として仏教徒ではなく、主としてキリスト教徒で、彼等は仏教からキリスト教に改宗させようとし、多くの貧しい仏教徒は援助後キリスト教徒になっております。

従って小寺院、又弟子の少ない故に晩年極めて忙しい余生を送っている老比丘は相当数あり、同じ仏教僧として見るに忍びずと、私と昭和二十九年以来親交あるラーマンニヤ派副管長バツディガーマ・ヴィマラワンサ長老は、老僧ホームをコロンボ郊外タランガマに建設することを発願。当初辻村泰円師（奈良・元興寺・真言宗、昭和五十三年月遷化）、私、釈旭朗法師（香港・普慧蓮社）に相談、協力を求められ、爾来今日に至るまで増上寺法主・藤井実応台下、祐天寺貫主・巖谷勝雄上人、西本願寺宗務総長・豊原大潤師、川井匡俊師（名古屋・宝周寺）、長田順海師（熱海・誓欣院）、他広く浄土宗、真言宗、浄土真宗、禅宗各寺院と檀信徒の浄財を得、去る昭和五十一年十二月十二日起工式、本年二月一日大統領閣下、各閣僚、駐スリランカ・アメリカ大使はじめ万人近くの仏

教徒が参集、盛大に落慶式が挙行されたのです。

現在、八名の老比丘が入所、近い将来二十五名に増やす予定ですが、内部のベッド、車椅子、机、台所用品、排水工事等不充分にて目下浄財により調達中です。

なお同長老の弟子にて滞日五年十カ月、その間高野山



—カダワタ児童養護施設—



—ダランガマ老比丘ホーム全景—

大学で大乗仏教と福祉事業を学んだシロガマ・ヴィマラ師（拙寺に六年有余滞留、現ハワイ開教区・カウチスタン浄土院主持・A・舜爾・ワジラワンサ師と兄弟弟子になる）は、帰国後母国の貧しい子供達に、仏陀のお慈悲に浴しての思いにてコロンボから車で約三十五分の距離にあるカダワ

タに孤児院、職業訓練所等の児童養護施設を建設するために努力されている。前述各宗派を超えての日本仏教界、国際ロータリー第二六六地区（大阪府下、和歌山県下八九クラブ）並に藤沢北西ロータリクラブ、奈良ライオンズクラブ等の援助にて現在八割方建設中、住居棟二棟、図書館、食堂、台所、事務所等六棟が来月二月中旬に竣工の予定です。

とりあえず、孤児四十名を収容してスタート、自転車、ラジオ、自動車等の修理、研修を兼ねて職業訓練所も併設、目下将来同国仏教界を背負って立つ少年団、青年奉仕団の育

成に懸命の努力、大いに胸をふくらませています。

近い将来、日本仏教徒が同地を往訪せし時礼拝出来る
との思いから、祐天寺貫主・巖谷勝雄上人は格別の念願
をもって本堂建立の予定です。

さらに、私の懇意にさせて頂いてます駐日スリランカ
大使スサント・ディ・アルウイス閣下は、去る五月十八
日の満月の日（仏陀の日）にヴェサク祭を同大使館で開
催、参列のアジア各国外交官、その家族の方々に仏教の
「困っている人々を助けるに、自身の皮肉骨ずいを提
供、即ち身体を捧げること、最大の理想、功德とす」に
よって、且つ日本からの経済援助のお返し of 思いをもっ
て、日本のアイ・バンク、じん臓・バンク、脳下垂体・
バンクに登録を呼びかけられ、早速百名近くの列席者が
署名登録、広く日本人にも協力されるよう提唱してい
られます。

加えて同国には国際アイ・バンクが政府、各種団体の
協力にて既に設置されており、今日までに日本に対して
五百眼以上を含めて、世界各国に角膜を提供していま
す。

終りに臨み、日本人とスリランカ人はアジアの同胞と

して、仏陀の教えに随順する同じ仏教徒として今後益々
友情の絆が深まることを心から祈念するとともに、斯界
の御協力を宜しく御願ひ致します。



スリランカへの友好のご寄付等のお問い合わせは左記へ――

〒658 神戸市東灘区住吉町垣内七番地

阿弥陀寺

TEL (〇七八) 八五一―三二一五

『浄土』誌の購読希望者のご紹介を、広くお願い
申し上げます。昭和五十五年四月より、年会費誌代
を三〇〇〇円に値上げいたしました。が見限りに
なることなく、どうぞ末永く宜しくお願い申し上げ
ます。

法然上人鑽仰会

けんちゃんのおぼん



ぬの
布村哲哉

おしょうらい おしょうらい

お馬にのって

じいさま ばあさま

ことしも きやれ

おぼんになると、けんちゃんの家では、おかあさんが、
そのしたくでおおいそがしです。

けんちゃんは、ろうかのいすにこしかけてうす暗くな

った庭を、ぼんやりとながめていました。

台所からは、おいしそうな、ごちそうのにおいがして
きます。

けんちゃんが、ごくんとつばをのみこむと、お腹の中
では、ぐうぐう。

「おかあさん、ごはんは、まだなの。お腹がすいちゃっ
たあ」

「まだですよ。おとうさんが帰っていらつしやったら、
みんなでいっしょに食べましょうね。それまで、もう少

しがまんしました。

それに、いつも、けんちゃんが作ってくれる、なすときゅうりの馬が、まだできていないでしょう。早く作ってあげないと、おじいちゃんや、おばあちゃんが来られないでこまるんじゃないの。」

おかあさんに、そういわれて、けんちゃんは気がつきました。

毎年、なすときゅうりに足をつけた馬を作って丸いお盆にのせてかざるのが、けんちゃんの役目になっていたのです。

なすときゅうりの馬をのせる、丸いお盆はとても古いものらしく、あちこちに、びびが入っていて黒く光っています。

もう何十年も使っているでしょう。けんちゃんのおとうさんもおかあさんも、おじいちゃんもおばあちゃんも、そのまた上のおじいちゃんもおばあちゃんも使っていた、仏さまのお盆なのです。

ですから、けんちゃんには、夏のおぼんと丸いお盆がいっしょになっていたのです。

いつもなら、おかあさんに云われると、台所へとんで

行つて、なすときゅうりの馬を作るのですが、お腹のすいているけんちゃんは元気がありません。

いやいや台所へ行つて、おかあさんから、なすときゅうりをもらうと、割りばしをポキンポキンといいかげんに折り、なすときゅうりに足をつけました。

でも足の長さがちがうので、お盆の上に立たせようとしても、かたむいたり、つんのめったりして、なかなか立つてくれません。

それでも、どうやらお盆の上ののつてくれましたが、けんちゃんが歩くと馬はあっちへよろよろ、こっちへよろよろ。いまにもたおれそうです。

「あつ、あ——。」

けんちゃんが、よろけたひょうしに、お盆と二ひきの馬は、あつというまにどこかへ、とんで行つてしまいました。

いそいで丸いお盆と、なすときゅうりの馬をさがしたのですが、どこにも見あたりません。

「おかしいな、このへんにあるはずなんだがなあ。」

けんちゃんが、きよろきよろしていると、そばで声がしました。

「けんちゃん、おじいちゃんとおばあちゃんだよ。ことしもやって来たから、よろしくたのむよ。」

びっくりしているけんちゃんの前には、なすときゅうりの馬にのった、おじいちゃんとおばあちゃんが、にこにこわらいながらいるではありませんか。

「ああ、おどろいたなあ。おじいちゃんとおばあちゃんだったのか。ちゃんと、ことしも来てくれてありがとう。でも、ぼくが馬の足を長いや短いのを作ってしまった、乗りにくかったでしょう、ごめんね。」

「いいよ、いいよ。すこしぐらい乗りにくくても、けんちゃんにあえたんだから。」

「そうだよ、そうだとお。」

おばあちゃんも、うれしそうにいました。

しかし、けんちゃんが、きょうきょうと何かをさがしているようなので、おじいちゃんがたずねました。

「なにを、さがしているんだね。」

「うん、さっき、ぼくが持っていた丸いお盆が、どこかへ行ってしまったんだよ。」

「やあ、そうだったのかい。それなら、ここにあるよ。」おじいちゃんが、そう云うと、ひよいとけんちゃんの

目の前へ、さっきの丸いお盆をさし出しました。

「おじいちゃんが持っていてくれたのか、ああ、よかった。」

けんちゃんが、受け取ろうとすると、おばあちゃんがいました。

「けんちゃんは知らないけれど、これは、とても不思議なお盆なんだよ。」

「へえー、こんな、ひびの入った古ぼけたお盆が。」

けんちゃんが、お盆に顔を近づけたとき、ピカピカピカリ／＼と、お盆が光ったのです。

おどろいてみるとお盆の上には、生まれたばかりのけんちゃんを、だっこしたおばあちゃんが写っているではありませんか。

「わあー、はずかしいや。」

「かわいい赤ちゃんだよ。それが、こんなに大きくなれたのも、おばあちゃんが、だっこやおんぶをして、かわいがってくれたからだよ。」

おじいちゃんが、いました。

ほんとに、ふしぎなお盆です。

おじいちゃんが、せつめいしてくれました。

「お盆がピカピカピカリと光ると、今そこにあるものを、下からささえているはずの、目に見えないものの姿が写るんだよ。」

「へー、おもしろいんだね。どんなものが写るんだろう。」

それにしても、こんなにめずらしいお盆は今までに、見たことも持ったこともありません。もちろん世界中をさがしてもないでしょう。

「このお盆、ぼくにかしてくれる。」

「いいとも。わたしたちが帰るときまでに、返してくれればいいんだから。」

「わあー、うれしい。なんでも写るお盆のテレビ、わあーいい。」

丸いお盆を持ったけんちゃんが、家の中をあみると、もうピカピカピカリと光っています。見ると、けんちゃんのからだをささえている、足のうらが写っているのです。

「そうだな、足のうらのおかげで、立つことも歩くこともできるんだね。」

家を建てた大工さんも写りましたし、運動ぐつをはく

と、こんどは靴やさんも。

けんちゃんが、外へ出て歩いたり走ったり、からだを動かすと写るのは、毎日たべるお米や野菜をつくる農家の人。海の中を泳いでいる魚たち。牧場の牛小屋の中の豚や鶏。それを飼う人、お料理をする人。

口から空気をすいこめば、お盆がピカピカピカリと光って、きれいな空気をたくさんに作ってくれる木の葉や太陽。

テレビを見ることができるようなのは、電線、鉄塔、発電所。

けんちゃんがバスにのれば、またピカピカリ。ガソリン、タンカー、ゴムタイヤ。それを作る人、運転する人。

またまたピカリ、またピカリ。

みんなが平和でくらせるのは、戦争でいのちをおとした多くの人の、ぎせいががあるから。

まだまだ写るお盆テレビ。

そして、ピカリコピカリ、大ピカリと雷さまのように大きく光って、お盆テレビ一杯に写ったのは、なんだったでしょう。

それは、けんちゃんを元気な子供にそだててくれていて、おとうさんとおかあさんのやさしい顔でした。

「やっぱり、けんちゃんを一番だいじにしてくれているのは、おとうさんとおかあさんだ。よかった、よかった。」

おじいちゃんとおばあちゃんが、けんちゃんの肩をたたいて、よろこんでくれました。

「おやおや、こんなところで眠ってしまった。おとうさんも帰っていらっしやったから、ごはんにしましょう。お腹がすいていたんでしょ。」

おかあさんが、いすにすわってぼんやりしている、けんちゃんの肩を、とんとんとたたきました。

玄関の方から、お迎え火のけむりが、ゆらゆらと、流れてきます。

(おわり)

◎『浄土』表紙版画販売についての一案内

好評の『浄土』誌表紙版画は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。好みます。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七



三絶・四限定

—俳句作法について—

河こう野の喜よし雄お

(文芸評論家)

序

私は、父が田舎の俳句宗匠をやっていたので、小学生時代から、俳句を作っていた。

長じて詩を勉強することになり、和漢洋の詩を、一通り研究したのであったが、その中で、芭蕉、ことにその美学に憑かれ、爾来、略々ほぼ五十余年、これと取組んで来た。

その間、昭和二十一年、南方から帰還して、郷里山梨

の有名な俳人・飯田蛇笏師（現、龍太氏の実父）の「雲母」門に入り、二十五年、その同人となり、拙句、

海山の明るき玉の大暑かな

が、蛇笏師の『現代の秀句を観る』に取上げられて、歳時記にも入り、その歳時記によって、朝日の「天声人語」にも取上げられた。

それで、私も、俳句は一応作れるのであるが、その専攻は芭蕉美学、その創作美学であるので、作句自体より

も、俳句作法、その作句論の方が、やや詳しい。

『浄土』誌の読者方には、大分俳句のお好きな方がおられるようなので、以下、私の「俳句作法」その「作句論」——を述べてみたい。

一、俳句は、世界最高・至難の文学

俳句は、表音文字、僅々十七字の文学である。俳句以前における短詩型文字としては、中国の五言絶句・二十字詩型が挙げられるが、これは表意文字であるから、短歌三十一字よりも、実質上は長いことになる。

そして、その僅々十七字を以て、文字を創作し得るものとしたならば、それが世界最短詩型であるが故に、同時に、最高・至難の文学である、ということになる。

現に芭蕉を代表とするところの、著名俳人たちは、その十七字のみを以て、美事に、その短詩型文学を創作しているのである。

秋風や藪も蟲も不破の関
行春や鳥啼き魚の目は泪

などの芭蕉句は、尤にそれを立証するであろう。

その芭蕉は、流石に、その十七文学創作の、至難であることを熟知していた。彼は、

一世の内、秀句三・五あらん者は作者也。十句に及ばん人は名人也
〔俳諧問答〕

と言っているのであり、名人でさえも、一生に十句程度しか、真の俳句的作句は出来ない、というのである。

流石に芭蕉には、どんなに絞ってみても、二十句以上の名句が存するのであるが、兎に角、表音文字僅々十七字のみを以てする文学創作が、至難の文学であることは、疑いなく、世界至難であるが故に、それはまた世界最高の文学であるのである。

その、世界最高・至難の文学と称して「第二芸術」などと仰言る、立派な先生がおられるのであるが、地下の芭蕉が聞いたならば、おそらく、抱腹絶倒するであろう。

では、その最高至難の文学の作法は、如何にあるべきであろうか。

二、三 絶

私はまず、「三絶」ということを、前提したいと思います。
う。

その「三絶」とは、三つのことを超絶することであつて、その三つのことは、一に抒情性、二に類想性、三に観念性であつて、作句に当っては、先ずこの三つのことに超絶しなければならないのである。

第一に、抒情性の超絶であるが、短歌三十一文字までは、まだ抒情が出来るが、十七字には、到底、そんな余裕は有り得ないのである。例えば、

やはらかに柳青める北上の

岸辺目に見ゆ泣けと如くに

土踏めど草鞋声なし山ざくら

咲きなんとする山の静けさ

啄木

牧水

というような名歌を、俳句に仕たち変えられたならば、どういふことになるであらうか。私案であるが、

北上の柳青めり泣けとこと
草鞋声なし山ざくら咲かんとす

というようになるであらう。

その前者においては、「やはらかに」という抒情詞とともに、「岸辺目に見ゆ」などという冗詞を超絶してあるのであり、その後者においては、「山の静けさ」という抒情詞とともに、「土踏めど」などという冗詞を超絶しておるのである。

そして、上掲、芭蕉の、「秋風や」「行春や」の両句においては、悠揚たる抒情を彷彿させながらも、抒情詞・冗詞などは、一字も見られないではないか。

第二は、類想性の超絶である。

文学というものは、個性的でなければならぬ。誰もが作るようなものを作ったとしても、そんなものが人の感動を誘う筈がないではないか。

俳句には、昔から句座・句会があつて、季題・席題が出るのであるが、同題下に作る次第もあつて、回想・類想の句が頗る多い。

それで、その回想・類想を超絶したところの個性句が、兎角、点数を集めがちなものである。

しかしながら、その句座・句会での点数を集めるような句は、まだその点数だけの、言わば回想・類想を捷ち得ただけであって、遠く衆想を超絶するような、真の俳句的俳句は、句座などでは、兎角見落されがちなものである。芭蕉は、其角の句を評して、

其角は同席に連るに、一座の興に在る句をいひ出て、人々いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人のいへる句は、ある事も有。
〔三冊子〕

と言ひ、また、

かれハ定家の卿也。さしてもなき事を、ことごとしくいひつらね侍る。
〔去来抄〕

と言っているのであって、其角の句には、真の俳句的俳句の少ないことを、暗に諷しているのである。

回想・類想は絶対に超絶しなければならないが、その

一法として、恐らく芭蕉の説を伝えたに相違ないところの、左の様な蕉門語録が存する。

許六曰、当句は、題の廓を飛出て、作すべし。曲輪中にはなきもの也。自然曲輪の内に有は、天然にして稀也。去来曰、発句は、廓の内に無キ物にあらず。殊に即興感偶するもの、多くは内也。然れ共、常に案るに、内は少ナシ。多くは古人の糟粕也。千里にかけ出て吟ずる時は、句多きのみならず、第一、等類を逃るべし。後略。
〔去来抄〕

「題の廓内」を、「千里に馳出し」て、「等類を逃れる」ことが、回想・類想を超絶するであろうことは疑いない。

しかしながら、敢て、「題」にのみ拘わらず、私たちの「詩的発想」自体において、常に可及的に、類想を超絶しなければならない。

故に、ある「詩的発想」を得た瞬間、直ちに、その発想が、類想的なものでないか否かを、切実に反省・自己批判することが必要である。そしてその自身の発想が、

この程度のことなら、誰しも考えよう、と思われる程度のものであったならば、直ちにそれを止揚して、次次元の、より個性的でユニークな発想をつとめてイデーすべきであろう。

最後は、観念性の超絶である。

俳句は、観念的なものであっては、絶対に文学たり得ずして、プロヴァーブ的なものになってしまう。故にそれは常に現実的・写生的なものでなければならぬ。

そして、その現実的「写生」に拠るところの、高度の「象徴」性によってのみ、俳句は始めて文学たり得るのであって、上掲、芭蕉の二句などは、尤にそれを立証するであろう。

三、四限定

そして、その「観念性の超絶」と表裏するところの、現実的「写生」の、具体的方策として、私は「四限定」ということを考えた。

その四限定とは、時間的・場所的・主体的および態様の、四限定である。

すなわち、何時・何処で・誰（何）が、どうしているか、という四つのことと、可及的的確に限定することであるのだ。

しかしながら、僅々十七字のみを以てしては、その四限定をすべて完行することは、絶対に不可能である。

故に、その必要不可欠なものだけを、可及的的確に限定する、ということが、その具体的方法である、ということになる。

私たちが一句を物したならば、直ちに右の四限定が的確に行なわれているか否か、仔細に検討すべきであり、それによって、その一句は必ずや、「一歩前進」するであろう。

けれども、「一歩前進」程度では、断じて、真の俳句的俳句は生れない。

芭蕉は、「舌頭千轉」と言った。俳句というものは、千度も作り替えをしなければ、真の俳句とはなり得ないのである。

「一歩前進」しつつ、「千歩前進」して、始めて、その人の真の俳句が生れるであろう。

以上で私見を終える。

浄土句集

一田牛畝選

東京 栗原とも子
竹の子の泥乾きつつ売られをり

東京 猪瀬 幸子

摩文仁丘ゆく夏雲に合掌す

山口 上野 明達
ナイヤガラ耳底に残る滝の音

評 未生、胎内、家庭教育が必要である。

幼時より寺詣りをして、先祖の力を受け

て先祖より強く育てなければならぬ。

東京 小笠原香祥

門の錆び花冷の廃寺かな

評 ナイヤガラの滝音は激しいらしい。耳

底にいつ迄も残ってなかなか消えない。

帰国して他のことは忘れ勝ちとなっても

滝音はいつになつたら消えるやら。

福岡 上滝津弥音

這い這いの孫立ち立ちや鯉幟

評 孫の姿がよく描写されている。這うこ

とが出来たと思えば、立つ事を、そして

鯉幟は風を得て勢よく泳いでゐる。

東京 新井 新生

更衣またも身軽となりけり

蛸焼の香りを抜けて藤の橋
東京 真野 竜

山口 三井 寛静

評 お祭りには蛸焼や綿菓子等の露店が人

氣を呼ぶ。その蛸焼の匂いより逃げて人

気なき藤の橋に煙草吸う人や誰。

京都 安藤 寛

涅槃図に入らぬ猫が本堂に

評 猫は何故か涅槃図には居ないのである

が。法要をつとめていると、寺の猫が本

堂に来て参詣の嬬の膝に眠っている。

山形 松田 光誉

一病を持つ身となりし夕蛙

山形 松田 允子

東京 吉田ゆきあ

みどり児も連れて一家の彼岸詣

啄木の歌碑を囲みて昼蛙

東京 細田 初枝
ひたむきに芸貫きて春を近く

東京 鈴木 葉子
青空にふらふら競ふ声高く

大分 丹羽 難中
お導師も水冠とられ浜薄暑

福岡 服部 光代
春愁や昔を語る恋の池

東京 阪入志津枝
春愁やひねもす雨に籠りゐて

福岡 安藤平次郎
代掻の響ひとつに乱れあり

福岡 原 敬二郎
藤の寺酒宴の客も仏縁と

愛知 渡辺 杜水
昼風呂に老懶の夏戒むる

山梨 青山富貴江
花冷や茶釜は湯氣を立てゝをり

群馬 島津 か寿
露天風呂桜も入れて撮りにけり

三重 山田 うた
露座仏に夕陽まぶしく柿若葉

福岡 林 澄山
どんたくの袴の娘が句碑除幕

東京 真野よし子
さりげなく騙^{だま}されてをり四月馬鹿

三重 森 静枝
御本尊みまえに拝む御忌会かな

福岡 世利 展雄
みほとけの供華の心に苗選ぶ

東京 吉原登起子
初夏の風竹竿売の声透る

福岡 権藤みきを
腰屈め見上げ見下ろす藤の房

福岡 沢河野ねはん
杜若修行大師の足元に

東京 田中 秀代
薄緑まとひ給ひし甘茶仏

福岡 荒牧 還愚
物好きよどんたく隊につき歩く

福岡 国友 星畝
京の僧島に迎えて法然忌

東京 栗原やえ子
こそり祝ぐ皇寿八十誕生日

福岡 前田 秀峰
どんたくの杓子^{しやくし}の揃ひ賑やかに

出稼の人も帰^{かへ}りて踊の輪
一田 牛畝



(読)
(者)
(の)
(べ)
(い)
(じ)

私の生き甲斐

遭い難い人生に然も此八十四歳の長寿を頂けた有り難さを憶う。無聊を聊^{がた}っている老人も多い。義務教育尋常六年卒業同窓五十七名が今四人(内男三女一)残っている。私達は余程に恵まれてある者と感謝御念仏の外はない。有り難いと云う文字は仏教渡来と同時にあり、以前にはなく「信を得させて頂く」以外に有り難いとの言葉はなかったと云う。それ程に難いが中の有益と感得している。此得難い新年の歳を頂くと、信仰不熟のため



清^{しみ}
水^す
栄^{さかえ}

(島根県太田市在住)

に、御仏が成熟を待つため、暫く今世に置いて下さるのだと合点^{がてん}せねばならぬ。心身一如(病気を治すは患者自身)、精神の健全あつてこそ健康はある。信仰の悦びの中にこそ生活の悦びはある。如何に社会補償が行届いても、心の貧困は救えない。内面の世界の広さをもつと開拓いたしましょう。お互い、欲の中に馴れ弱れて、御仏に頂いた大切な口より溢れ出る愚痴の多いこと。怒りは相手に抛^なつけても倍^{はね}になって跳^はね返るもの、残り少い生涯を華と



も飾るべきを哀れ勿体ないことよ。本田の稲も周囲の条件揃って、分蘖も八十四本草丈けよく成長したが、扱て秋の実りは如何に。穂となつては、折角長生きさして頂いた甲斐がない。得難い（無二の有難い）此地上にある自覚もなく、虫螻同様に出世の自分を忘れ、忙しい忙しいと右往左往しては居まいか。田の畦畔より見る水虫廻転の如くに哀れなり。懐つかしや御先亡親様を偲んで御仏前に合掌しましう、幼時よりの躰はよしや真似なりとも度量ねれば真にせまる。珠数の如く一家連綿としての相続こそ大切です。両親のお胤のよくて此頌健を得たのであり、私共の衛生精進は原因しても九牛の一毛である。機根最劣の当命、理論は日々倍增華やかだが理論で世の中が明るくなるものなら、紀元も二千年もつともつと上等の住みよい心豊かな、世間になつてゐる筈と思う。恵まれた余生を日常に生かし、小善小徳も重ねよう。脚下の雑草一本抜くことも、墓道を掃除することも、郷

土の先哲を学ぶことも、皆生き甲斐の一つと己が自身天分のままに、夢にも無聊を唧ちますまい。私は学習した修身徳目もさることながら、青年団時代より模範日を設け、一事故行を併せ八十四歳の今日まで面白く続けて居る。お蔭で退屈して欠伸した自覚がない。自分の生れた十九日が模範日、月会は三日（父上の命日）。年中二十四日の行儀を反省している。十七歳より日記帖して六十八冊目、今日尚続く。奥深い底なしの魅力ある郷土史。古文書解説にアマながら没頭して、二十八年になる。人として一番美しい姿とは、謙虚に仏前へ慎ましく合掌すを心そのものです。仏教は合掌の教である。物識りや理屈好みでは縁遠い。悦びと悲しみの二ツの反対のものを、静かな形で併せもっていられる面影の美しさに、惹れる。自然随順、御仏えの全托とも云うか。世間混沌の昨今なればこそ、他力念仏の御利益は倍加する、この御念仏を生き甲斐とする同信の者の輪を拡げて人間らしさに戻



りたいものだ。御民吾れ生ける驗しるしあり天地あめつちの、榮ゆる時にあいらくを思えば。天平の昔にさえ「生ける驗」と歌ってある。生き甲斐を今の人、味わえるや否や。御仏前に晨朝（四時）閑坐冥目合掌して御覽よ、自然に湧き上る御法悦、口を衝いて出る自然隨順の感謝念仏、夕べ九時の就眠前お勤めも五重相伝紀念行で十四年になる。父、子、孫の三代一ツ棟の下に安穩の起居を偕にする幸福に勝る宝を知らぬ。此心境を称して世間は極楽トンボと。呵々百万円の御仏壇も拝礼なくば徒らに飾りもの、流行の総廟墓も香華なくば骨捨場と同じ。御仏前に晨朝の礼拝こそ一日の始終であり、生き甲斐の原点と感じている。同信の私たちは、三世を通して善因善果の理をよく弁えて、徒らに目前の小慾に久遠の法悦を失ってはならない。時折りは初心にかえて、反省こそ大切で、風化しつつある御念仏が歎げかわしい。幸せは他人より与えられるものではない。自分自身で作り出すもの、胸

中を豊かにし、それを養い育てるもの、と感得している。温い周囲にも健康にも恵まれた、御念仏の日暮し、成したい事は山程あるので、早寝早起、数えて見ると寝るのは一日七時間、私の二年は他人の一年である。六十歳に隠居生活、後の二十四年は他人の四十八年、プラス六十年が百八歳が現在迄の私の実働年齢と云う可きか呵々。任他（さまたけられ）、性に合うた無償の働きこそ私の生き甲斐。八十四老はこの信念あるか故に大きく脱皮して心眼を開かせて頂こうとしている。何事も心で人生を作るし、心か人生を支配する。吉凶は糾う縄の如しと。陰極は必ず陽転する。目前の明暗に一喜一憂せずして自然隨順の世渡りこそ大切だ。だのに近頃の迷信の流行の如何。新年の初詣り等に祈願種目の多いこと流石に武運長久はのってこない。昔より「万一、若し」は彼我注意の外はない。感謝念仏に祈願の無理を重ねますまい。『浄土』誌に啓蒙二十六年三百冊を架上に見て。



念佛ひじり三国志 (全七)

——法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

「唐土（もうこし）の洛陽に巨大な石窟があつて、二万をこえる磨崖仏が刻まれているそうな」

法然は、突如として話題を転じてきた。

「有名な竜門石窟のことでございますな」

住蓮にも知識だけはあった。

「あの磨崖仏のなかで最大のものが大盧舎那像だ。碑文によれば、皇后武氏助シテ脂粉錢二万貫。奉勅ノ檢校僧

ハ西京實際寺の善導禪師とある」

「ははあ……」

「俊乗房重源の話によると、大盧舎那仏のお面相は描きつたえられた皇后武氏と瓜二つだそうな」

「それが、どうか致しましたか」

住蓮には何を法然が言いたいのか、まるで方途が掴めない。

「碑文の善導が『道』なので、善導禪師とは別人かと思つてきた。しかし咸亨三年にはまぎれもなく在世しておるし、西京の實際寺にいた記録も歴然だ。善導禪師であ

〈竜門石窟〉



ることはまぎれもない。まぎれもないと判明すれば、私は迷わされるのだった」

「何をお迷いになったのですか」

「皇后武氏、唐高宗皇帝の後だが、この人の求めに応じ、しかも顔つきまで似かよわせたとはどういうことか。果たしてあの善導さまが、ほんとうに検校なされたのであろうか」

法然は若やいだ声で語りつなぐ。

皇后武氏――

後世の人は則天武后と呼んだ。中国の帝王史上でも稀有な残虐、恣意な独裁者であった。

初めは唐太宗の妃だったが、その死とともに落飾、僧院にこもった。たまたま亡父の回向に訪れた息子の高宗に見染められ還俗してその房室へはいる。

当時、唐王家の後宮は王后以下、貴妃美姫がひしめいていた。武氏は専ら才智で、この「女の闘い」を勝ち抜き、遂に正后の座を掌中にした。ライバル女性を蹴落すためには陰湿な謀略、残忍な密殺を辞さなかった、と伝えられる。

皇后となつて夫の高宗を完全に支配すると、武氏の紅

蓮の凶刃はいよいよ猛威をほしきまにした。「北京好日」の著者である林語堂博士の分析類計によれば、唐王族関係の被殺者は七十三名、功臣將軍で処刑された者は三十六名に及んだ。

ために則天武后と言えば残虐無惨、飽くなき権力の渴望者――この単一色で人間像を塗りこめられている。

だが則天武后の大量虐殺、それも身内や近臣に限られていたが、この暴挙は権力志向からのみ発したものであろうか。これらを暴びきたてた新旧の「唐書」に多少の誇張はあったにせよ、その全事実を認めた上でなお筆者は彼女のために弁明の通路を開けておいてやりたい。

則天武后は山西省汶水で材木の運搬を業とする富商の娘だった。身分は低いが純粋な漢民族である。この血の誇りが彼女の野望を刺戟し、一つの使命観を肥大化させたみたい。

美貌を買われて後宮入りをした唐王家。彼らの血は漢民族ではなかった。源流は北辺鎮守の任にあった漢兵の出自だったが、中央政權の乱暴の間に現地に根をおろしてしまい、柵外の鮮卑族（モンゴル系）と雑婚をかさね、家産を保全し発展させてきた。中央政界が乱れば乱れ

るほど、この家における鮮卑の血流は濃厚となり、太宗の李世民は風雲を得て一気に長安の都を制覇したのであった。

その子、高宗の母文德皇后も太宗蹶起の同志長孫無忌の妹である。四字名でも明らかのようにモンゴル遊牧民の出自だ。高宗の正后だった王氏もこの母方の姻戚にあたる。彼女と高宗の寵を競っていた蕭妃は隋の煬帝の娘ということになっているが、じつは煬帝が殺したあと皇后を奪った叛臣宇文文化及が彼女に生ませた子である。宇文文化及は突厥系(トルコ)の武將だった。

則天武后は高宗の後宮で、まず正后王氏と蕭妃の対立を激化させ、蕭妃のなぶり殺しや王氏の毒殺に直接彼女が関与したとされている。その真偽はともかく、漢民族の誇りが手段をえらばずに正皇后の地位を、と彼女をかちたてたにちがいない。鮮卑や突厥の血を引く女に負けてなるものか。

則天武后に「純血」の使命感がなければ理解できない事件が、やがて突発する。高宗との間で生んだ二人の息子、太子弘と太子賢をあいっいで殺してしまうのである。二十歳近くにまで成人した息子たちだった。彼女が

生んだ子はこれで絶滅したわけだ。驚くべきは彼女の子、彼女には孫になる二人の少年も咎をめた打ちに浴せて殺してしまうのである。

唐王家の血を引く者は絶対に生かしておかない、というこの狂奔ぶりは「純血」の使命感以外には考えられない。

さらにこの使命感を裏付けるように、夫の高宗が死ぬと則天武后は自ら帝位に昇る。中国三千年の歴史に現れた唯一人の女帝となった。

帝位に就くや国号の「唐」を「周」と改めてしまう。

漢民族の純血による遠い王朝をしのんだからにちがいない。後世の漢人史家のなかにはこれを「武周革命」と呼んで則天武后を高く評価する者もいる。

ところで夷狄の混血を排除する大量虐殺の渦中で、則天武后は例外と言ってもいい凶刃をふるう。唐王族やそれに臣従した高官や武將たち以外の血を流したのである。「純血」の漢民族の血であった。

則天武后には韓国夫人と呼ばれた同腹の姉がいた。彼女にまさるとも劣らぬ才気渾身の女性で、早くから夫と別れ妹武后のもとに身を寄せていた。こよなき話相手と

なった。

この韓国夫人が死ぬと——武后の手で謀殺という説もある。武后は一人娘の賀蘭氏を引き取って育てた。掌中の珠のように愛した。武后自身の若き日と瓜二つ、絶世の美貌だった。

賀蘭氏が成人するや、虫がつかぬうちにと嫁入らせた。こうして後宮から遠ざけてはみたものの、時すでに遅かった。大きな虫が取りついたのである。夫の高宗が強い執心で、彼女を婚家から連れ戻して後宮に囲こってしまった。魏国夫人と呼ばれた。

則天武后は女の激しい嫉妬からこの姪を毒殺したのだった。若い魏国夫人が白蠟のような顔で死の床に仰向くのを眺め、武后はよよと泣きくずれた。

「可愛想に妾の姪が……誰かが陛下に毒を盛ったのです。それを、あの子が先に口へ入れてしまったばかりに……この仇はきつと討ってあげる。可愛想に」

料理の素材となった山東省の前菜、これを献上した從兄二人(武后の異腹兄の息子たち)はたちまち捕縛、処刑されたのである。

決定的な証拠が武后を姪殺害の犯人と名指している。

この前菜は魏国夫人と二人だけで食べ、武后の方はけろりとしていたからである。

可愛い姪の死体に取りすがってよよと泣きくずれる。自己の犯跡をくらます演技だったであろう。だが演技は真実の慟哭に変質し、彼女の胸を深部でえぐったことであらう。

二

「善導さまともあろうお方が、なぜ皇后武氏のような女人のために大盧舎那仏を檢校なさったのであろうか。それもじゃ、仏像のお顔を武氏その人に似させて造仏なさるなど……私はこの点だけは善導さまを疑い、迷いを深くしてきた」

法然是一座を見まわして心懷を吐露するのだった。

法然の病室で、聴き入る者はすでに住蓮だけではなかった。いつのまにか中ノ房から門弟たちが上がってきて同座していたのである。

法然在世のこの当時、則天武后像はどのようにとらえられていたであらうか。奈良朝このかた遣唐船はひんば

んに往復し、情報や文獻は過密なまでにもたらされた。そこには先進文明国「唐」を憧憬する日本人の意慾も見逃すわけにはゆくまい。「旧唐記」や「資治通鑑」が広く知識層の間で読まれたことであろう。

これを裏付けて、則天武后の密事を下絵にしたと思われる風聞が、すでに奈良の宮廷内を吹きよった。僧玄防や道鏡と王后、女帝との醜関係がしきりに書きつたえられてゐる。

玄防は唐に渡り、法相義を学び伝えて名僧の誉れも高かった。帰国後は宮廷へ出入りし、聖武帝をはじめ貴人たちを教化した。そのうちに聖武帝の母后である藤原宮子と情を通じた。法然の師ともなった皇円阿闍梨の「扶桑略記」は、宮子が玄防の胤を宿したとも書いてゐる。

藤原宮子は不比等の娘で、有名な光明皇后の異母姉にあたる。いや「源平盛衰記」や「今昔物語」になると玄防と光明皇后との房事をまことしやかに書く。

——広嗣、后宮ニ参リ給イタリケルニ玄防、婚遊シ給エリ。広嗣奏シテ申サク、玄防后(光明皇后)ヲ犯シ奉ル、ソノ咎最モ重シト。帝(聖武帝)更ニ

用イ給ハズ。広嗣マタ后宮ニ参リタリケル時、玄防マタ后宮ト枕ヲナラベテ臥シ給ヘリ。重ネテ奏シテ云フ。玄防只今后宮ト席ヲ一ツニシ給エリ。叡覽ニ及ババ重科自ラ露頭セント申ス。帝忍ジテ幸成テ御簾ノ隙ヨリ叡覽アリ。光明皇后ハ十一面觀音ト現ジ、玄防僧正ハ千手觀音顯レテ、共ニ慈悲ノ御顔ヲ並ベテ同ジク濟度ノ方便ヲ語り給ヘリ。皇帝イヨイヨ叡信ヲオコシオハシマシテ、広嗣ハ国家ヲ乱スベキ臣ナリ。一天ノ国師タリ、貴キ僧ヲ讒シ申ス条、罪科深シトテ西海ノ波ニ流サレタリケレバ、怨ミヲナシテ謀反ヲオコス。凡夫ノ眼前ニハ非梵行婚ト見奉レド王賢帝ノ叡覽ニハ大悲薩埵ノ善巧方便ト拜ミ給フモ、アナ貴シ

「源平盛衰記」はこう書いてゐる。皇后の不義密通を告発した忠臣が逆に乱臣と退けられ、聖僧と賢夫人の情交は「菩薩行」なのだ、と強弁する。

これは筆者の皮肉なのか。それとも仏法唱導が過激へ走ったものなのか。

この光明皇后の娘孝謙女帝(称徳帝)と弓削道鏡との情

交譚も古來、語りつくされてきた秘史である。

眞偽はともかくとして、われわれはそこに則天武后と妖僧懷義とのただれた閨房風景の再現を見せられる思いだ。女帝の貪慾で恣意な風儀が、この島国の宮廷へも生まな形で持ちこまれたと断じてよいであろう。

当然、この時点の法然にも則天武后像は鮮明に灼きついていたと考えられる。

「念仏ひとすじに生きて、人間平等を主唱されてきたはずの善導さまが、なぜに権門へ屈しての造仏であろうか。それも仏相を皇后になぞらえるとは、媚び以外の何ものでもない……沙門ハ王者ニ敬セズ。これこそ廬山慧遠師以来の専修念仏者の衿侍ではなかったか」

法然の声音からはすでに病いの影が消え失せ烈々たる力感がよみがえっていた。聴く者の肺腑を灼きつくさずにはおかない唱導僧の情炎だ。

「善導さまはその廬山慧遠禪師の直流でありました」

熱に浮かれたように応じたのは若いひじり覚明房長西であった。

「私は迷いながらさまざまな唐代の資料をあさった。竜門石窟の謎が解けた」

「善導さまはなぜ武后のお顔を大盧舍那仏にひき写されたのでございましょうか」

この問題に関しては若い長西の方が住蓮などより遙かに造詣が深かったようである。

「あれは皇后武氏を似せたものではなかったのだ。武氏と瓜二つ、姪の賀蘭女だった」

「賀蘭女——」

魏国夫人のことである。

「皇后武氏は自らの手でこの姪を弑した。罪の恐ろしさに身も世もなかった。善導さまの前に懺悔しつくしたにちがいない」

「なるほど」

「王の権力には屈しないが、その大罪には手をさしのべて共に泣くのが善導さまじゃ。王后の罪も、少女の罪も差別はない。善導さまは賀蘭女の菩提をともらうと共に、皇后武氏の罪がいささかでも軽減するように願って、渾身こめてあの大盧舍那仏を弟子らに造仏させたのであろう」

と、法然は断じたのである。

ところで竜門石窟の大磨崖仏にまつわる法然のこの推

論は、さまざまな面で裏付けられる。

魏国夫人の賀蘭女が則天武后によって毒殺されたのは乾封元年(六六六)の八月ごろだったと言われる。竜門石窟に現存する碑文による大盧舎那仏の完成時は咸亨三年(六七二)の四月である。死後六年、つまり姪の七回忌を目ざして武后が脂粉錢二万貫を投じた、とも思える。

しかもこの造仏供養の過程で武后が善導に帰依し、敬虔な仏弟子の生活を送ったらしいことがうかがえる。例の林語堂博士が作製した百人を越える「武氏殺人者」で、その年次を追うと魏国夫人の殺害後、彼女の魔手びつたりと動かなくなる。次の犠牲者は十年後の上元二年(六七五)の四月に毒殺された太子弘であった。則天武后にとっては平和で、つつましかな十年間なのである。

伝えられる善導の死は永隆二年(六八一)である。武后の魔手が再発してなお六年間生きたわけだが、善導の教化力はすでに武后へは通じなくなっただけであらうか。

善導の足跡は、竜門石窟の碑文のあと則天武后の前はおろか長安や洛陽からも消えてしまう。そして義浄の「大唐西域求法高僧伝」は晩年における善導の所在を漢水のほとり、襄陽に指向するのである。

貞固律師なる僧がインドへ渡海することを決意し、準備として各地に仏教の権威ある諸師を歴訪して歩く。その一環として、

——マタ襄州ニ往キ和上ノ処ニ在ツテ重ネテ蘇咀羅ヲ聴キ対法蔵ヲ披尋ス。頗ル蕙処ニ通ジテ溥ク衣珠ヲ検シ、化城ニ是レ息ンデ終ニ宝渚ヲ期ス。遂ニ乃チ足ヲ裏水ニ濯ギ、盧山ニ顧歩シテ上徳ノ清塵ヲ仰ギ……

とある。

和上が善導であることは、同じ貞固が以前にも襄州に彼を訪ねている記事があるので明らかである。

襄州ニ往キ善導禪師ニ遇イテ弥陀ノ勝行ヲ受ク。

コノ時ニ当リ交索詞ノ穢土ヲ棄テンコトヲ望ミ即

チ安養ノ芳林ニ趣カント欲ス

蘇咀羅とは、もちろん梵語のストトラの音訳語で、経蔵のことであり、対法蔵とはアビダルマのこと。つまり

經を聴き、アビダルマを披尋したのである。薄ク衣珠ヲ
檢シ化城ニ是レ息ンデ終ニ宝落ヲ期スうんぬんは、渡海
にあたり淨土教の蘊審をきわめつくせたということであ
ろう。廬山ニ顧歩シテ上徳ノ清塵ヲ仰ギは、慧遠法師の
遺徳を追慕するということだ。

ところで襄陽という街だが、長安洛陽の北都と江南の
文明が接する地点で、とりわけ北魏仏教はこの仏都を拠
点として江南の沃野へひろがっていった。慧遠法師は廬
山へ登る前、襄陽で二十年近くも修業研鑽につとめてい
る。江南を旅した曇鸞が止錫したであろう事実は充分に
想像できる。そして善導が晩年を此処ですごしたのもこ
く自然であらう。慧遠流第一の継承者とうたわれた善導
であった。

三

貞固律師が襄陽に善導を訪ね、その後も江南各地に諸
師の門を叩き、インドへ向って南海を船出したのは善導
の寂後八年、永昌元年（六八九）七月二十日と記されてい
る。だが、船便その他の事情でインドへは渡れず仏逝国

（現スマトラ島か？）止まりだった。同行者はこの「西域求
法高僧伝」の著者義浄らである。

結局その地で諸經典や仏教文献を蒐集したにとどまり
嗣聖十一年（六九四）彼らは中国へ帰ってくる。翌年の五
月、義浄と貞固律師は洛陽の都へ戻ったが、その折則天
武后は上東門外まで出迎えたという記事も残っている。

善導が入寂した年月日について旧記にはわずから誤差
がある。王古の「新往生伝」は永隆二年三月十四日だ
が、西明寺の僧玄暢になる「帝王年代録」では年月は同
じでも入寂の日が二十七日と二週間あとになっている。

適確な資料はないが、入寂地は洛陽であって、十四日
に亡くなった善導の遺骸を火葬にし、その骨を終南山神
禾原の香積寺に運んで埋葬したのが三月二十七日だった
のではないだろうか。

善導の遺骸が火葬に付された事実は「浄往伝」にある
「時ニ京師士大夫誠ヲ傾ケテ帰信シ、ミナソノ骨ヲ収メ
テ以テ葬ス」の記事が明らかであろう。ただしこの「浄
往伝」は善導の死を「願畢リテ其ノ樹上ニ於テ身ヲ投ジ
テ自絶ス」と善導の法文を聴いて柳の木から投身自殺を
した青年の姿とダブらせている。

善導の思想や信仰からすれば自絶往生などあり得ない。この記事は往生者善導の姿を活写するための宣伝文である、と従来は理論上の否定だけに終始した。ために、いや壮絶な欣求浄土の投身自殺だつてあり得るではないか、と水かけ論に持ちこまれたことであつた。

この「浄往伝」は文章をつないで「高宗皇帝ソノ念仏口ヨリ光明ノ出ズルヲ知り、捨報ノ時精至カクノ如キヲ知り、寺額ヲ賜ワリテ光明ト為ス」と書く。

義浄の「西域高僧伝」がふれる襄陽所住の善導が二河白道の善導であるならば（——同名異人だとする説もある）、貞固律師の二度目の訪問を渡海年次から逆算すると、六八〇年前となる。この年次は高宗皇帝の死の直前であり、最後の二年間は病苦に責められて殆んど起き上がれなかった、とも言われる。

善導の入寂を知って「光明贈額」もあり得ないであろう。柳下自絶説が明確に否定できる。

さて、門弟にかこまれて竜門石窟への迷いを解明してみせた法然だが、力感にあふれた主張を語りつくすと、そのまま黙りこんでしまった。荒い呼吸を両肩できざんだ。

久々の説法口調で疲労の極に達したのであろうか。

憂色のこもる視線を師へ集めた門弟たちは、しかし途端に事情をこわばらせた。氣息絶えるかと思われた法然の瞳は異妖に輝き、鋭氣にみちた眼光のなから門弟の一人一人を凝視しているではないか。

内なる氣力が眼光へ集中したのであろうか。それとも肉体の廢絶を兆す鬼氣が発しはじめたのか。

「お師僧さま、おやすみになられませ」

言葉やさしくいたわつたのは善恵房証空であつた。

それを振り切るように、

「念仏者とは、王法に屈しない。いや、絶対に屈してはならないのじゃ」

怒号に近い声を発したのだった。

「王法に屈せず……」

住蓮は思わず声に出して反駁していた。

法然はその住蓮を注視した。何か、さらに言いたげだったが、口もとほそれきり動かなかつた。

やがて住蓮は、西入の佐々木四郎高綱と連れ立って東山を下っていった。

さっきは「選択本願念仏集」の一節を書写することに

専念し、法然の説教を聞きそびれた四郎高綱には話題がなかった黙々と駒をつないだ山麓の地点へ向って歩き続ける。

住蓮の胸は昂奮でゆれていた。

法然がなぜいきなり則天武后や竜門石窟の話題を提起してきたのか。その意図が明確に理解できた。

おそらく法然は、あの座にいた誰よりも切実にかつ深刻に現実を受け止めていたにちがいない。法然自身に、念仏教団に迫ってくる魔の手を。その危機感に従来の南都北嶺から押し寄せる迫害の比ではなかったのである。

駒をつなぐ老松の前まできた。四郎高綱とは別れねばならなかった。

「西入どの。今後も弥太郎判官には密着し続けてくれ。わが師にかかわるような風聞は巨細に関係なく報じて欲しい」

「住蓮、おぬしはどこに棲んでおる？」

「じつは居所もその日暮しで定かではない……いや、それと下手な場所であつたことは西入どの、御身のためによろしくない。此処にしよう」

「此処に？」

住蓮は笑いながら、いま四郎高綱が結んだ手綱をほどいている老松の太枝を指さした。

「あの枝へ文にしてくくりつけておいてくれ。正午と入り日の夕刻、毎日二度づつ必ずわしはその文を取りにくる」

「わかった。聞きこんだ筋があれば必ず……」

「頼みましたぞ」

黒鹿毛はぼくりぼくりと歩き出した。その背へのぼろうともせずに四郎高綱も歩調を合わせて歩いている。

外見はいかついが、この黒鹿毛、駄馬にちがいない。

馬を見送っているうちに住蓮はふと一人の人物像を思い出がいた。呟きが唇からこぼれた。

「そうだ。あの男も駒にかけては達人だったはずだ……」

平氏の騎馬武者。いまは念仏ひじりとなった空阿弥陀仏——

いまだここにいるのか。

俄かに逢いたくなって、住蓮は洛中洛外に散在する別時道場の幾つかを思い浮かべた。今宵あの男は、それらのどこに姿を現すであろうか。

「水無瀬かな」

呟いて、洛外も遠く天王山麓にある小さな観音堂を思
うかべて微笑した。

あそこがいい。今宵あの男と出逢うには如何にも恰好
な場所ではないか。水無瀬へいつてみることだ。

空阿弥陀仏がその観音堂へ現れるという保証は何一つ
ない。時たま狭い堂内にひしめいて別時念仏会をひらい
てきた。空阿弥陀仏も二度ばかり加わったことがある。

それだけだったが、住蓮は無性に「賭け」てみたくな
った。今宵、奴は必ず水無瀬へ現れるであらう。あそこ
で待つのだ。

目的地が決定し、住蓮の歩巾は俄かにひろまった。都
大路を南下していった。

(つづく)

◎ハガキ印刷や案内状等、小物印刷にご利用下さ
い。ご寺院関係の皆様に、とくにご紹介します。

◇ 阿島印刷有限公司 ◇

〒164 中野区弥生町五―八―十六

TEL (〇三) 三八二―一十二二

〓新刊〓

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共二二ページ (カラー刷)

定価三〇〇円 (送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六

大 道 社

舞見御中

〒170 東京都豊島区西巢鴨三二〇―一	大正大学 電話(〇三)九一八―七三一代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六	佛教大学 電話(〇七五)四九一―二二四一代表	淑徳短期大学	学長 長谷川良昭	〒174 東京都板橋区前野町五―三―七	京都文教短期大学	学長 大橋俊有	〒611 宇治市鎮島町八〇
埼玉工業大学 松川文豪	淑徳高等学校長 里見達人	〒174 東京都板橋区前野町五―一四―一	鎮西学園理事長 鎮西高等学校長 真和中・高等学校長	上田祐規	上宮学園 鵜飼光順 鵜飼隆玄	鵜飼光順	鵜飼隆玄	鵜飼光順	鵜飼隆玄
東山学園長 石井俊恭 京都市左京区永観堂町五一	東海高等学校長 滝俊立	〒496 津島市神守町 阿弥陀寺住職 社会福祉法人 神守保育園理事長	学校法人 芝学園 理事長 豊岡益人 学校長 徳久鐵郎	祐天寺 巖谷勝雄	祐天寺 巖谷勝雄	祐天寺 巖谷勝雄	祐天寺 巖谷勝雄	祐天寺 巖谷勝雄	祐天寺 巖谷勝雄

舞見御中署

無量山 伝通院

九品寺住職

漆間 純成

〒530 大阪市北区同心一―四―八

回向院

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二八―一〇

九品仏浄真寺

清水 順碩

東京都世田谷区奥沢

蓮勝寺住職

神奈川県仏教会副会長

柴田 敏夫

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四
電話(〇一三八)二二―一五七八

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六―二
電話(〇四四)二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸 寺

原口 徳正

岩手教区教化団長

円光寺住職

加藤 順底

〒020 盛岡市南大通三―二―四九

〒030 青森市本町一―一―二二

正覚 寺

楠美 知行

光運 寺

飯田 信弘

〒510 四日市市中部三―一二二

舞見御中

廣隆寺住職

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一丁目

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六一五

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

浄土宗議會議員

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二一五一

お骨仏の寺 一心寺

高口恭行

〒543 大阪府天王寺区逢阪上之町一五五
電話(〇六)七七一一〇三七一(代)

知恩院布教師会九州支部長

聖徳寺住職

金子貫達

〒850 長崎市錢座町四一五九

浄土宗議會議員

光明寺住職

山口諦存

〒673 明石市鍛冶屋町五一二〇

新善光寺住職

太田隆賢

札幌市中央区南六条西一丁目

浄土宗新潟教区長

照専寺住職

川端大祐

〒947 小千谷市寺町二八五一

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二一三一一八

遍照寺住職

宇佐美諦練

〒461 名古屋市中区泉二一九一二三

宝台院

野上達雄

舞見御中

松庵寺内無為窟主

小川 金 英

〒025 花巻市双葉町六一四

仏教福祉センターよるひる銀行

群馬教区長

野口 善 雄

〒376 桐生市本町六一三九八 浄運寺

稲田 稔 界

財団法人日本宗教連盟理事長
財団法人全日本仏教会理事長
浄土宗議会議員

鯨 淵 正 浩

宇都宮市塙田 浄 鏡 寺

法然上人二十五霊場二番札所

さぬきの寝釈迦

仏生山 法 然 寺

浄土宗議會議員

国友 俊 雄

福岡市少林寺住職

総本山知恩院顧問会長

八 木 善 祐

〒448 刈谷市野田町西屋敷二一一

昌 福 寺

お寺は皆さんの相談所
桜と観音さまのお寺

本郷 駒込 浄 心 寺

小 池 政 雄

仏教図書

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷

五一二八一四

教育えほん

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋

一一一一一六

『浄土』誌印刷二十年

長谷川印刷(株)

〒114 東京都北区上十条

二一一四一二

法然上人鑽仰会

舞見御中署

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部 仙順

電話(〇三)八一―一三三七

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

光明寺住職

白幡憲佑

横浜市南区庚台(久保山)

西住院

戸川 靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二―四

電話(〇二八二)二二―〇八〇二

芳泉寺

なぎ しん じゅん
柳 楽 真 純

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん
〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗教学局長

法然上人降誕慶讃事務局長

大田 秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

金田 明進

〒302 取手市白山二―九―二八

弘経寺

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十六年七月二十五日 印刷

昭和五十六年八月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷 録

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八―八二―八七番

舞見御中

總本山 知恩院

門主 高畠寛我

浄土宗宗務庁

浄土宗東京事務所

大本山 増上寺

法主 藤井実応

大本山 金戒光明寺

法主 稻岡寛順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 宮本文哲

大本山 光明寺

法主 石井真峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

法然上人御降誕地

二十五霊場第一番

誕生寺

岡山県久米郡久米南町里方
中国従貫道路大阪より二時間

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

〒248 鎌倉市長谷四―二―二八

滋賀 福泉寺
敦賀 西福寺

鵜飼隆玄